# 令和５年度全国学力・学習状況調査における

# 北九州市立　　河　内　　小学校の結果分析と今後の取組について

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、令和５年４月１８日（火）に、６年生を対象として、「教科（国語、算数）に関する調査」と「児童質問紙調査」を実施いたしました。

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。

学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にしていただきたいと思います。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科等も含め、総合的に学力向上を目指しています。

## １．調査の目的

⑴　義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。

⑵　学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。

⑶　そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

## ２．調査内容

⑴　教科に関する調査（国語、算数）

| 教科に関する調査（国語、算数） |
|---|
| ①　身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等<br>②　知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力等に関わる内容 |

※調査では、上記①と②を一体的に問うこととする。

⑵　児童質問紙調査

| 児童質問紙調査 |
|---|
| ○　学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査 |

※本校の６年生については、単学級ですので、個人が特定されないように公表の方法については、配慮しています。

## ３．教科に関する調査結果の概要

### (1)　全国・本市の学力調査（国語、算数）の結果

| 本年度の結果 | 国語 | | 算数 | |
|---|---|---|---|---|
| | 平均正答数 | 平均正答率 | 平均正答数 | 平均正答率 |
| 本市 | 9.3 | 66 | 9.4 | 59 |
| 全国 | 9.4 | 67 | 10.0 | 63 |

### (2)　本校の学力調査結果の分析

| | | |
|---|---|---|
| 国語 | 全体的な<br>傾向や特徴など | 平均正答率は、全国平均を下回っている。「言葉の特徴や使い方に関する事項」や「情報の扱い方に関する事項」についての正答率の差はわずかだったが、読み取ったことを記述する問題の正答率が、全国平均を大きく下回った。また、正答率の分布から、個人差が大きいと言える。 |
| | よくできた問題 | 「話すこと・聞くこと」「読むこと」に関する問題のうち、選択式の問題についての正答率が高かった。 |
| | 努力が必要な問題 | 自分の考えをまとめたり、目的や意図に応じて比較したりするような記述式の問題の正答率が特に低かった。 |

| | | |
|---|---|---|
| 算数 | 全体的な<br>傾向や特徴など | 平均正答率は、全国平均を下回っている。「数と計算」「図形」の領域に関する問題は全国平均と大きな差はなかったが、「データの活用」領域の平均正答率が、全国平均と比べて差が大きかった。正答率の分布から、個人差が大きいと言える。 |
| | よくできた問題 | 求め方や答えを式や言葉を用いて記述し、その結果から条件に当てはまるかどうかを判断する問題の正答率が、高かった。 |
| | 努力が必要な問題 | 表やグラフから、条件に合う数を読み取ったり、見出した違いを言葉と数を用いて記述したりするような、データ活用問題の平均正答率が、低かった。 |

## ４．学校での学習活動、家庭での生活習慣等に関する質問紙調査結果の概要

| 質問紙調査の結果分析 |
|---|
| ・「早寝・早起き・朝ごはん」に関する問いへの肯定的な回答が、１００％であった。基本的な生活習慣の定着が見られる。<br>・「学校に行くのは楽しいと思うか」「先生は、授業やテストで間違えたところや、理解していないところについて、分かるまで教えてくれていると思うか」という問いに対し、全員が肯定的な回答をしている。学校や担任に対する信頼関係や安心感がうかがえる。担任をはじめ職員が一丸となって児童に向き合ってきた成果であるととらえられる。<br>・「人が困っているときは、進んで助けますか」「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか」についてすべての子どもが肯定的な回答だった。規範意識の定着が見られる。一方で、「自分には、よいところがある」と答えた児童が6割にとどまった。自己肯定感の涵養がまだまだ必要である。<br>・家庭での学習時間や、読書習慣に関する問いに対しては、二極化していることがはっきりしている。机に向かう習慣や本に親しむ時間を確保していけるよう、学校と家庭の連携が今後も必要である。 |

## ５．調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組

①　教科に関する取組

○朝学習やパワーアップタイムの時間も有効に活用しながら、基礎・基本の着実な定着を図る。そのために、音読チャレンジやドリルアプリも積極的に活用する。
○主題研究に複式学級における効果的な授業展開のあり方を位置づけ、授業改善やより分かりやすい授業づくりを進める。

②　家庭生活習慣等に関する取組

○「10分×学年＋10分」を家庭学習の目安として毎日宿題を出すとともに、学年に応じて「自学ノート」を活用し、予習や復習に取り組むよう家庭と連携して指導を行う。
○スマホやゲームとの上手な付き合い方、インターネットトラブルに関する啓発を行い、家庭との連携を図る。